

## ペテロの手紙第一 2章 1-10 節

### 「100%純真か、それ以下か」

讚美歌：説教前 258

説教後 187

「クリスチャン」とは、ギリシャ語に由来することばで、「キリストに属する者」を意味します。キリストに属するとは、単に名乗ることではなく、その御声に耳を傾け、その教えに聞き従い、さらには自らの十字架を負って歩むことを意味するはずで、ところが現代の教会を見ると、この本来の意味から少しずつ距離を置いてしまっているのではないかと、いう指摘をししばしば耳にします。すなわち、クリスチャンとは信仰に生きる者というよりも、キリスト教文化の中に身を置きながら、輪郭のぼやけた形で日々を過ごす「文化的キリスト教徒」になっているのではないかという指摘です。

確かに、イースターやクリスマスは大切に記念されます。ですが、より根源的な事柄——キリストの教えに真剣に聞き従い、自ら十字架を負いながら生きること——が、私たちの実生活の中心に据えられているかと問われるなら、必ずしもそうとは言い切れない現実があるのではないのでしょうか。

今朝は、ペテロの手紙第一、2章のことばを見ながら、クリスチャン生活の土台となる「キリストの教えに聞き従うこと」について学んでまいります。とりわけ、聞き従うとはどのような姿勢、どのような心をもってなされるべきなのか、その点に目を向けていきたいと思えます。

さて、ここで少しこの手紙の背景についてですが、ペテロの手紙が宛てられたのは、一世紀、現在のトルコ地方に点在していた諸教会でした。彼らはキリストを知り、福音による「喜び」に満たされ、希望にあふれていたようです。クリスチャンとしてあるべき姿に近かったと言っても良いでしょう。

ですが同時に、彼らはまだ未熟だったという側面もありました。信仰は芽生えたばかりで、決して安定した段階に達していたわけではありません。だからこそペテロは、この手紙を通して、彼らを忍耐強く教える必要を覚えたのです。救いに到達するためには、今のレベルで満足してはならず、さらに高いレベルに到達する必要があるということです。

### 1-2 節

**1** ですからあなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、

2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

1 節のほうは捨てるべき内容が、2 節ではそれを捨てた上で霊の乳を求めなさいと教えられています。

先にこの 1 節のほうの捨てるべき内容についてですが、そのほとんどが内面的な事柄を扱っていることは注目に値します。人は内面よりも目に見える「行為」のほうに集中する傾向があります。内面はどうであれ、行為においては悪いことをしなければいいという理屈でしょう。ですが、ここではそのような理屈が許されていません。

その 1 節の具体的な内容ですが、「悪意」はもっとも包括的な言い方となっており、そこから「偽り」「偽善」「ねたみ」と三つ続きます。これら三つはいわば、その人の内面と行為の間の不一致のことを言っています。自分を良く見せるため、あるいは、他人に対するねたみを動機として神を求めているようであってはならないということでしょう。

最後にペテロは、行為の中でも、悪意が目に見えるかたちで最も現れやすい「悪口」を挙げています。他の行為ももちろん退けられるべきものですが、ここでは「悪口さえも」いけないとされており、きわめて厳しいことが言われています。

そもそも、ペテロは行為の背後にある「悪意」そのものを捨てるよう求めていますので、ここで示されている基準は、総じて、極めて高い基準です。

しかも、その内面的な悪意を余すところなく捨てなければならないと言われています。1 節をもう一度ご覧になっていただきますと、3 度「すべて」ということばが出てきていることが分かります。したがって、まったく悪意がないような状態に至らないといけないということとなってきます。

では、内面的な悪意をすべて捨てた上で何をするべきなのか。2 節を見ますと「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい」とあります。

乳飲み子が乳を慕い求めるときには、動機は一つしかありません。本能的にそれが生きるのに必要だと感じているという点だけで、偽善やねたみというような動機は微塵もありません。つまり、1 節で言われている純真な状態を体現しているのが乳飲み子です。

続く、「純粋な、霊の乳」はみことばをはじめとした、神のみおしえ全般のことを言って

いるようです。では、純粹でないみことばはあるのかということですが、みことばを読んでいるときに、偽善を動機として読んだ場合、その人はみことばをパリサイ人のように、心の中で読み替えます。したがって、その人にとってのみことばは、実質的にはいろんな混ぜ物をしたみことばだと言うことができます。そうであってはならないとここでは教えられています。

最後に、その目的が言われています。「成長し、救いを得るため」です。現段階ではまだ救いには至っていないということでしょう。

ここで立ち止まり、改めてこの 1-2 節で言われていることを振り返りたいと思います。不純な動機はみおしえの学びに簡単に入り込んでしまいます。教会でも、自分が立派なクリスチャンだとアピールするため、自分の悪いところを正当化するため、宗教的なわざとして、等、様々な動機が働くものではないでしょうか。そして、そうした動機が少しでもある限り—たとえ「救いに至るまで成長したい」という動機も共存していたとしても—その人にとってのみことばは歪んだものとなり、救いにつながりません。

では、できている人はどのような人なのか。少なくとも、その人は人の評価を気にしない人であり、敵対心がないような人です。そして、自分が救いを必要だと自覚していて、それを必死に求めている人です。自分に不利なことも聞き入れますし、分かっていないことは偽らずに「まだ分かっていません」と認められますし、学ぶことを通して社会的に何か得ようとしません。かえって、恥をも受け入れられる人です。つまり、みおしえから学ぶときには他人のことなんて考えない、自分の霊的な必要を追求するので精一杯のような人です。必死に、そして真剣にみことばを求める人です。

では、なぜそれほどまでにしてみおしえを求めるべきなのか。

### 3 節

あなたがたは、主がいつくしみ深い方であることを、確かに味わいました。

ここでは、神を味わった当然の帰結として、みことばを純真に求めるべきだという論理が確認されています。

新改訳 2017 では「確かに味わいました」となっている部分ですが、「確かに味わったのなら」と訳すほうが良いのではないかと思います。つまり、原文ではより、「そうではないのですか」と働きかける手法で語られています。

もう一点。新改訳2017で「主がいつくしみ深い方」と書いてある部分についてです。原語は「いつくしみ深い」とも「濃密」とも訳すことができますが、この後者のほうがこの文脈にあっているのではないかと思います。つまり、本当に濃密で、疑いの余地がないほどに良いものとして神の教えを味わったのであれば、一心にそのみおしえを慕い求めるべきだということです。

次に、「飲む」という比喻から、建設についての比喻へと切り替わっていきます。今度は、みおしえを体現するキリストについて次のように語られています。

#### 4 節

主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。

キリストに対する態度は極端に二分するものだという真理がここで教えられています。キリストが石だとすれば、人はそれを捨てるものです。でも、神はその石を選んでいるという対極的なことが言われています。ですので、主のもとに行くということは、墮落後の人間の本能と逆行するようなことをするということとなります。

ここでこの「捨てられた」ということばについて補足しておきたいと思います。原語においては、「吟味した上で捨てられた」という意味で、誤って捨てたということではありません。したがって、キリストをよく知った上で、不要と判断したということです。

この4節は続く5節とも密接に関わっています。

#### 5 節

あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。

キリストが生ける石だというとき、家を建てるために使う石のことです。ここでは、この手紙が宛てられたキリスト者たちも、同じように生ける石となっているとされています。みおしえに従うようになり、はじめていのちを得て、生きるようになったということでしょう。

人はみおしえを吸収した結果、救いへと成長していくわけですが、さらにその結果として神の臨在がともにある人、つまり「霊の家」になるということでしょう。

さらに、別の側面として、彼らは聖なる祭司となると言われています。祭司の役割をひと

ことであるならば、人間と神の間をとりなすためにいけにえをささげ、また人々に聖になるように教える役割を持っていました。この世において、そのような役割を持つようになると言われています。

続いて、ペテロは 4-5 節までに語った内容の根拠を三箇所、旧約から挙げます。その一つ目。

## 6 節

聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。」

これはイザヤ書 28 章 16 節からの引用です。その文脈では、「死と契約を結んだ」という理由で安心するイスラエルの民の姿があります。この「死との契約」について、推測の域ですが、当時の祭司や預言者たちが、自分たちに災いが来ないと言い切る教理を作りあげていた可能性があります。教師たちは、民に救済を約束してしまっていたのでしょう。いずれにしても、宗教的なその「死との契約」という用語の背後に潜んでいたのは、実質的には神を無視した救いです。それは宗教的な偽りで、信仰とは逆行していたのです。

それに対し、イザヤはこの箇所のことばを語っています。「要石」とは建物の土台の角に据えられるもので、それを置く位置で建物の形状が決まっていたとされています。この要石は神ご自身、すなわちキリストを指し示していたのですが、その要石に信頼する者は「決して失望させられない」とあります。

「宗教的教理ではなく、神であるキリストを」という内容の発信をせざるを得なくなったこの預言の背景には、偽りばかりを語る宗教的指導者たちがいました。彼らは宗教的に入り組んだ、難しい教理を語っていましたが、その難しいことに民を依り頼ませることにより、実質的には民が神を見失うように働きかけていたのです。だとすれば、「捨てられた石」というのは宗教的な理屈により、宗教的指導者たちが捨てたということになります。

1 節から 2 節を見たときに、すでに申し上げましたが、少しでも純粹さを欠いた形でみおしえを聞いていたら、それは非常に危険なことです。イスラエルの教師たちもまさしくそのような人たちで、みおしえを歪めてしまい、人々に偽りの教理を信じさせていたのです。教師たち自身の心の中に不純な偽りや偽善やねたみがあり、それが影響してみおしえが歪んでしまっていたのです。彼らは中途半端に神を求める側面もあったからこそ、自分たちが間違っていることに気付けなかったのでしょう。彼らはまったく無意識だったこと、そして善意でしていたということが想像されます。

それとは逆に、純粋な心でキリストを尊いと確信し、慕い求めるのであれば、それはキリストを信頼しているということであり、その人はこのことばで言われている通り、失望することはありません。

続いて、信じていない人たちについて、二つの引用があります。この信じていない人は、教会の一部でもあり、不純な思いで神に接している人のことでもあるということ覚えて読む必要があります。まず、7節。

## 7節

したがってこの石は、信じているあなたがたには尊いものですが、信じていない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」のであり、

ここでは詩篇 118 篇 22 節が引用されていますが、そこではイスラエルの民に対し、人ではなく、神に信頼する必要性について教えられています。そして、その中に登場するのがこの引用部分です。ここで石を捨てたのはイスラエルの民だったと考えるのであれば、神の民でさえも神を捨てるものだと分かります。それでも、その民の行為を完全に無視する形で、その石が要の石となったのです。

さらに注目していただきたいのは、その石である神を捨てたのは「家を建てる者たち」だと言われている点です。つまり、石について一番よく知っているべき人たちが、それを捨ててしまったということです。キリストを見出すには、単なる人間的な知識や知恵以上のセンスが求められるということとなってきます。

最後に、8節の引用があります。

## 8節

それは「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからであり、また、そうなるように定められていたのです。

この最後の引用はイザヤ 8 章 14 節からのものです。そこでも、つまずいたのは神の民であるイスラエルでした。この三つの引用からも分かりますが、聖書記者たちの目には、民の中で神を信頼して生きているように見える人がほとんどいなかったようです。

この引用のイザヤの文脈についてですが、当時の南ユダ王国は周辺諸国の軍事的脅威に対し、国々と同盟を結ぶことで対処しようと目論んでいました。とはいっても、当時の外交

と宗教は分離できるものではなく、実際には宗教指導者たちが外交にも関わっていたと見るべきでしょう。つまり、「あの国と同盟を結ぶのは神のみこころだ」と思っていたということです。

ですが、そのような外交的努力は、実際には神を信頼できないと考えている証拠でしかありませんでした。南ユダ王国は、無意識的に神を捨てていたのでした。

そのような民に神は石を送りました。その石はキリストを表して民にとって救いになる可能性もあったわけですが、その石を不要と考えて捨てるのであれば、その判断が決定的となり、その民はつまずき倒れてしまいます。つまり、キリストに頼ることなく、外交に頼るのであれば、民には災が降ってくるということです。

続いて、節後半をご覧ください。「彼らがつまずくのは、みことばに従わないからであり、」の「従わないから」とは原語において、説得があっても我を通すといった意味であります。聞き入れない頑なさが問題だということです。乳飲み子のようにみおしえを慕い求めるのとは、まったく逆の生き方だとも言えます。

そして、節の最後にある「そうなるように定められていた」についてですが、これは神が彼らをつまずかせたと読むべきではないでしょう。むしろ、神はその人たちの心の頑なさを知っており、キリストを与えたのであれば彼らが拒否すると知りながらも、キリストを送り、つまずかせたということです。

であれば、ですが、神は良い人をもっと良い方向に行かせ、悪者は、その状態をさらに悪化させているというようなこととなります。つまり、神は人をふるいにかけ、その立場をはっきりと二分させるということでもあります。

7節から8節はキリストを慕い求めない人についてでしたが、続く9節から10節ではもう一度、ペテロが手紙を送ったキリスト者たちについて言われています。

#### 9-10 節

**9** しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。

**10** あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。

9 節は出エジプト 19 章 6 節のことばと深く関わっています。イスラエルがエジプトから出たばかりの頃のことです。その頃に与えられた使命は「祭司の王国、聖なる国民」となることでした。ただ、結局のところ、イスラエルはこの使命を果たせずに終わりました。

ところで、新改訳 2017 が「王である祭司」と訳している部分ですが、これは「祭司の王国」と訳しておいたほうが無難ではないかと思います。実は、引用している出エジプト記のほうでは「祭司の王国」と訳されていて、そちらのほうが妥当ではないかと思います。つまり、これは構成する者たちの全員が祭司である王国のことであり、全員が王でもあって祭司でもあると考える必然性はありません。

すると、9 節から 10 節にかけて教えられているのは、聖であり、祭司であり、神を知るようになったという三つの霊的な事実によって、手紙が宛てられた教会がひとつの民を形成するようになったということです。まさしく神の民となったということです。

ただ、そのように言われているからと言い、彼らは楽観できない状態にありました。今後神を求め続けなければどうなるのか分かりません。ですので、神の期待と、彼らの理想的とは言えない現実との間には、少なからず緊張関係があったと言えます。使命をまっとうし、神が期待する通りの民を形成するのか、そうではなく途中で離れていってしまうのか、教会次第だったと言えます。

同じく「祭司の王国、聖なる国民」とまで呼ばれて選出されたイスラエルの民はその使命をまっとうすることができず、神から離れていきました。新訳の時代に生きるペテロの読者たちはどうなのか、本当にキリストに従っていくのかと問われていたと言えます。

さて、最後にまとめと適用に移りたいと思います。

本日の箇所を振り返りますと、命じられていることはひとつのことだけでした。それは 2 節にあった「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい」という命令です。この命令を守っていれば、その人にとってキリストは要石となりますが、守らないのであればキリストはその人にとってつまずきの石となります。

すでに申し上げましたように、「生まれたばかりの乳飲み子のように」慕い求めるというのは 1 節で言われた通りに「すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨て」たような状態でみおしえを求めることであります。つまり、真剣に、そして自分の救

いのことだけを考えてみおしえに接する態度が必要とされてきます。そして、これは推奨ではなく、救いの前提条件だということも覚えておかなければなりません。

この点について、私自身も説教を準備していた時点では、考えの甘さがありました。本日の説教題として「100%純真か、それ以下か」とさせていただきましたが、もともとは「純真か、偽善か」という説教題を考えていました。

ですが、気付いたのです。ここで言われていることはそのような生ぬるいことではなく、はるかに厳しいことだったのです。1節をご覧になっていただければお分かりになるかと思いますが、偽善よりも純真さが勝ればよいといった問題ではないのです。ペテロが言っているのは、本当に悪意が微塵もないような状態でなければならないということです。「すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨て」。純真さを、不純な思いがない状態と定義するのであれば、ここでは「ある程度の純真さ」が求められているのではなく、不純な思いをすべて取り除いた、100%純真な状態が求められているのです。つまり、100%純真なのか、それ以外のあらゆる態度なのかがここで問われているのであります。

しかも、です。100%の純真さはゴールではなく、救いに成長するためのスタートラインに過ぎないのです。2節の終わりに書いてある通り、そこから「成長し、救いを得る」のであります。

すると「要石」としてキリストを受け止める人は稀で、「つまずきの石」としてのキリストに出会い、つまずく人が多いということになってくるのではないのでしょうか。

この点についてですが、注解書を読みますと、私が見たものすべてが、この「つまずきの石」でつまずいたのはキリストを信じない未信者で、「要石」としてキリストを受け止めたのがクリスチャン全般だと言うのです。ですが、本当にそうなのでしょうか。百歩譲って、ペテロがこの手紙を宛てていたクリスチャンたちは立派で、キリストを「要石」として受け止めていたのかもしれませんが、ですが、現代に至るまでの教会も要石としてキリストを受け止めていると言えるのでしょうか。本当に100%の純真さを備えているのでしょうか。そうではないのではないのでしょうか。

根拠としてまず、旧約では「つまずきの石」につまずいたのは異邦人ではなく、神の民だったという単純な事実があります。ですので、旧約に倣って新訳に当てはめるのであれば、みことばに従わずにつまずくのはまづクリスチャンだと見るべきではないのでしょうか。

それに、要石としてキリストを受け止める人というのが純真にみおしえを聞く人のことで

あれば、それが教会だと断定するのはあまりにも甘い見方なのではないかと思うのです。むしろ、教会はイスラエルと同様に要石であるキリストを捨て、悪意や偽善に満ちた読み方で聖書を読んでいる可能性はないのでしょうか。つまり、「つまずきの石」にすでにつまずいている可能性はないのでしょうか。

結局、「石を捨てる」ことが殺人を犯すことや、背教行為など、派手なことだと思っているからそう誤解するのではないかと思うのです。本来「捨てる」とは、地味ですが、不純な思いでキリストを求めた結果、自らにさばきをもたらすことなのです。しかも、本人には神を求める思いが中途半端にあるからこそ、神を捨てていると気付けないのです。

ですが、客観的にその人の人生を見れば、実質的に捨てているということ、キリストがアクセサリー程度の扱いにされているということは明らかなのです。それは教会生活にも現れます。真剣にみことばに接し、そこから救いを得ようという態度がないからです。みことばから学べるかどうか、いのちがかかっているという自覚がないのです。

ですので、今日の箇所の命令「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい」は現代の頑なな教会に自らの姿勢を問い直すように迫っていると言えます。「私たちはキリストを必死に慕い求めているのか、それとも捨てているのか」と問われているのです。でも、神のあわれみがあるという希望もまだ残っていると付け足しておくべきでしょう。

自分が救いへと成長していくためだけに必死にみことばから学ぼうとしている人は、一目瞭然です。本気で頑張っている受験生とそうでない子を親が見分けることができるように、見れば分かるのです。当然、神の目を欺くこともできません。神は私たちすべてをご覧になっています。

ですので、私たちは神の審判は迫っている中、ますます神を恐れ、自分の心にある不純な思い、つまり、心にあるあらゆる悪意や偽りや偽善やねたみを捨てて、真剣にみことばを慕い求めなければなりません。それで、なんとか悪意のまったくくないような状態に心をもっていき、救いに辿り着く者でありたい、そう思われる次第であります。

祈り：すべてをさばく父なる神様

本日、あなたが私たちに 100%純真な思いであなたを慕い求めることを要求しているということを知りました。これは至って当然のこととして受け止めます。ですが、気付いたらあらゆる自己中心的な思いで心は満ちていき、すぐに不純になってしまうことも覚えます。

どうぞ、まずあなたが見ているように自らの心を見ることができますように。そして、「純粋な思いであなたのみことばを聞き入れ、救いに必要な知恵を蓄積していく」そのような人生を生きることができますよう、助けを置いてください。

イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。